

私が訳詩を作る時、音の数を数えるのはもちろんのことだが、言葉の表現で気をつけていることがある。それは第一にイントネーションだ。けれど外国語の歌を日本語に変換するわけだから、ところどころイントネーションが狂ってしまうのは否めない。けれど言葉としてひどすぎないように注意する。そして次に心がけるのは「ら」抜き言葉を使わないこと。文語体に近くすること。たとえば口語では「待ってる」というが、「待っている」と表現する。言葉というものは「生き物」であるから、時代に従って変化していくものであるが、耳触りとして丁寧な言葉を選択する。スラングは流行りもので、時間が経てば通用しなくなるものもある。現にある時期、若者の間で流行っていた言葉が、2歳くらい違ふと通じないものもある。それから生活環境によって耳にする機会がない言葉もある。私は時々、近くの若い人に「こういう言葉知っている？」と問いかける。すると同じ年代でも知っている人と知らない人がいる。というわけで、できるだけ通用する言葉を選ぼうとすると、基本の日本語というわけになる。私が何故そこにこだわるかという、あるエピソードがある。

それはオーストリア航空と日本航空のコード・シェア便に乗った時、オーストリア人のフライト・アテンダントが流暢な日本語を使ったからだ。私は海外で「日本人はマナーを知らない」と言われるのが嫌で「こんにちは」(或いはおはよう、こんばんは)や「ありがとう」は必ず現地の言葉で言うようにしている。そのため何らかの会話が生じる。その時も「ダンケ・シェーン」の一言から、彼女の日本語の会話につながった。その時耳にした言葉。その響きはとても美しかった。イントネーションは完璧。それ以上に感激したのは、今の日本ではまずお目にかかれない正しい日本語だったからだ。もちろん欧米人が日本語を習う場合、日本人が欧米語を習うが如く文法を学習するので、正確なものであるに違いない。しかし、そのとき私が感じたことは「なんて美しい言葉なのだろう」ということだった。つまり「日本語はなんて美しい言葉なのだろう」「こんなに美しい言葉だったのか」ということである。規定通りに喋る—それは日常生活では少し親しみが足りないかもしれないけれど、社会的にはとても感じよく心地よい。彼女がとても優雅に見えたことと言葉遣いは連動していると推察する。また日本の旧家の若いお嬢様であるが、その方の日本語の美しさも未だに時々思い出す。いずれも上品な雰囲気や辺りの空気を穏やかに包み込んだ。だから私は歌の場面と詩の意味を曲げることのない範囲で、できるだけ上品に近づく言葉を選びたい。もちろん旬の言葉が人の心を一番動かすことは知っているけれど。果たして気取らない上品さと魂の叫びは連動するものだろうか？私は「YES」の可能性を捨てない。

それから歌詞を作る時もう一つ注意するのは、個人の発音の癖で誤解を招く言葉だ。「言葉だけ」ならほぼ誤解はないが、音楽に言葉を乗せる時、少し詰まったり伸びたりすることがあるので、言葉に癖のある人が歌うと違う言葉に聞こえてしまうことがある。例えば「美容院」が「病院」に聞こえるのはジョークにあるところ。その他「少女」が「処女」に聞こえたら、一気に品が下がってしまう。そこで「実はこの言葉にしたいのだけれど」と思っても他の言葉に置き換えることがある。同じ意味で置き換えられる言葉。それはボキャブラリーの探索でもある。

そういうわけで、私がよく使うのは日本語の辞書である。言葉の流れに気を取られて意味がつながるだろうか？と日本語を確認する私は生粋の日本人である。(2012.6.9)